国際研究論叢　22（2）：25～48，2009

「森の村」のエコツアー研修の実践過程：
着想から実施までの簡略な省察

橋　本　義　郎*

Developing a University Eco-tour to a Forest Village

Yoshiro Hashimoto*

Abstract

This article discusses the process of developing a university course named *Eco-tour* or *Ecology Study Tour*. The course comprises university classes and a tour to Kawakami-mura. The process of developing the course consisted of six phases: 1) the idea, 2) a pilot tour to Kawakami-mura, 3) the planning and preparation of the course, 4) the implementation-including the tour itself, 5) reflection on the tour, and 6) revision of the course. Phases 4 to 6 will make a spiral process if the course continues to be improved.

Participants were positive towards the tour at the reflection stage. Next the writer will explore the effects of the tour on the participants.

キーワード

エコツアー　　エコツーリズム　　環境教育　　共生

Keywords

eco-tour　ecotourism　environmental education　cohabitation

はじめに・・・研修参加者の声と本稿の目的および守備範囲

2008年５月24日から25日に、奈良県吉野郡川上村（森林面積が97％[1]をしめる「森の村」）を現地活動の場（フィールド）とした大学生のための「森の村」のエコツアー研修の現地研修を実施した。昨年の10月に第１回を実施し、今回は２回目である。その「ねらい」は次の通り。

「原生林や山里と自分の心身が共鳴する心地よさと楽しさをガイドツアーに参加して味

＊はしもと　よしろう：大阪国際大学人間科学部教授〈2008.9.17受理〉

わう。生態系（エコシステム）の保全・回復と両立する野外活動やレクリエーションについて、インタプリター（エコツアーの企画・案内の専門家）による現地指導を受けながら体験学習する。」[2]

さて、その効果はどうだったか。参加学生のすべてが原生林ツアーは初体験で、生まれてはじめて森を流れる川の水をそのまますくって飲み、杉と檜の間伐を体験した。森の天然の水の味に魅せられ、「森の村」で暮らし、働き、遊ぶ人びとのあたたかいもてなしに感激した。ある男子学生はこう言った。「また、自分で来たい。単位はなくても来たい。」

参加者の声を、研修レポート[3]からいくつかひろってみる。

「一人の時間をすごして、本当の意味で自然を感じれた。川の流れる音、カエルの鳴き声、森の香り、すべてが心地よく感じれた」「何より、人の温かさがとても嬉しくって印象に残っている。」「川上村での経験を広くみんなに知ってもらって、森林の大切さ、私もエコツアーの参加者として伝えていけたらいいなと思った。」

「川の水を飲むのは初めてで、冷たくておいしかった」

「間伐をするにしてもロープをくくったり、一人でやるには大変な仕事ということがわかった。」「木だけじゃなくて、大切にしなければいけないのは、水や石や土や生き物、虫など全部なんだと知った。」

「300年育てられた木を見に行った。」「大きくて３～４人で手をいっぱいに広げてようやく一周。自然の力はすごい」

「草を食べたとき、苦いような、すっぱいような味がして、初体験だった。ふしぎ・・・」
「森があるから、人間は生きていけるんだって事をもっとみんなに分かってほしい」

参加者の自己評価にもとづくならば、「ねらい」を達成する向きの効果は、いくらかあったようだ。

本稿の目的は、研修の企画・実行者でもある筆者（研究者）が、体験調査を主たる調査方法としたフィールド探索調査[4]にもとづき、「森の村」のエコツアー研修の実践過程（着想から２度の実施までの過程）を概観・省察し、その改善のための一助とするとともに、同種の活動を実践する人やこれから試みようとする人との出会いと対話の媒体にすることである。

なお、「森の村」のエコツアー研修の正式プログラム名は「エコツアーと自然公園ガイド研修」で、大阪国際大学人間科学部人間健康科学科の専門選択科目である。筆者自身が発案し、研修基地である「森の水の源流舘」の職員との共同で企画・実施し、統括責任者

そして指導教員として参加している。

執筆の順序は次の通り。

1　「森の村」のエコツアー（〈森村エコツアー〉と略称する）とは何か
2　〈森村エコツアー〉のフィールドとしての「水源地の森」と川上村の概況
3　〈森村エコツアー〉研修の実践過程の六つの段階
4　今後の課題・・「むすび」として

1　「森の村」のエコツアー（略して〈森村エコツアー〉）とは何か

ひとくちで言うと、「森、そして、その森と共に生きる人びとの村（暮らしの場）をフィールド（活動の場）とするエコツアー」が〈森村エコツアー〉である。「森村」、すなわち「森の村」は現地研修活動のフィールドをさす。「エコツアー」という言葉にはさまざまな定義[5]があるが、本稿では次の意味で使う。

その過程において、参加者自身が、野生生物のいる「生きものの共生」[6]の世界をふくむ天然の生きた自然のなかですごしたり、その自然と共に暮らす人びとと現地で出会あって、共に活動したりする機会がある、体験体感（自分でやってみて、自分で直接感じること）を重視する旅行で、その活動が直接・間接に次の機能をはたすことをめざしているもの。

①「人間の福祉」[7]と「人間の喜び」[8]の基盤となる生態系（以下、《人間福祉生態系》とよぶ）の保全・回復
②人間福祉生態系の保全・回復とむすびついた暮らしのかたちと文化の保全・回復や創造

2　〈森村エコツアー〉のフィールドとしての「水源地の森」と川上村の概況

立地と周辺環境

奈良県吉野郡の川上村は、吉野川（和歌県に入って「紀の川」と名をかえる）の源流の村である。奈良県の中東部にあり、東隣は三重県の松阪市と宮川村。役場は東経135度57分、北緯34度22分、標高345.9メートルの地点にある[9]。吉野川をはさんで西には世界文化遺産の古道がある吉野・大峰の連山、西には日本最多雨高原の大台ケ原がそびえたつ。川上村にはこれらの山と高原への登山口がある。その集落の一つ柏木には、大峰山に登る修験者や登山者が利用する旅館や民宿があり、かつては芝居小屋がたつほどの賑わいがあった。

吉野川は村の中央部を深い谷をなして南から北に向かって流れ、それにそっていくつもの集落がある。1950年（昭和25年頃）までは山で切り出された杉や檜の丸太で組んだ筏がそこを下っていた[10]。「村内には、上流の北和田・白川渡・中奥と下流の大滝・東川に筏夫が多く、人数は、大正初期の盛時には100人に達していた。」[11]

図表１　川上村の位置

出所：吉野川源流・水源地の村「かわかみ」（川上村地域振興課発行の観光ガイド、2007年11月改訂）

気温と降水量

2003年の月平均気温は最高が８月の24.４度で、最低が２月の0.7度。月間降水量は最多が８月の447.0ミリ、最低が12月の54ミリで、年間降水量は1962ミリである[12]。大阪府のほぼ中央部の平地にある守口市に住む筆者にとっては、夏は涼しく、冬もそれほど寒冷でない、気象的に居心地のよいところである。雨は多いが、そのおかげでしっとりとした森と、みずみずしい苔が生きつづけている。

面積と人口

面積は269.16平方キロで大阪市の面積（222.30平方キロ）より広い[13]。そこにしめる森林面積は261.13平方キロメートルで村の全面積の約97％におよぶ。まさに「森の村」である。しかし人口は（2008年５月31日現在）2013人で、大阪市（264万9601人）の1316分の１弱である[14]。

川上村の誕生

川上村の誕生は1889年で、川上郷の23ヶ村を合併してつくられている。当時の人口は5526人であった[15]。

産業

川上郷（川上村）では今から500年も前の室町時代に植林がはじまり、かつて大阪城や桃山城などの城郭建築に、伊丹や灘の酒を運ぶ酒樽の材にとさまざまに重宝された[16]。川上村をふくむ奈良県吉野郡の杉の人工林は日本三大人工美林の一つであり、この吉野の

人工林を育て、良質な材木の「吉野杉」を生産する林業として「吉野林業」が生まれた。その発祥の地が川上村である。しかし現在は、その規模が縮小傾向にある。1945年の林業労働者数は908人であったが、2005年にはその10分の１以下の68人まで減少している[17]。

こうしたなか、あらたな産業として村の内外から注目されつつあるのが、多雨地域であり広大な森林をもつ「水源地の村」としての自覚のもとに、その特性をいかしたエコツアーとむすびついた観光業と特産品の製造・販売業の促進による地域振興である。この関連で、「水源地の森」を購入し、「森と水の源流館」・「山幸彦のもくもく館（川上村林業資料館）」・「匠の聚（工房・ギャラリーや宿泊施設からなる複合施設）」などを開設している。

観光による地域振興策を村がかかげたのは今から20年前からのことで、以来、村の紹介をかねた事業を各地で展開してきている[18]。2007年の夏には、大阪市の北東に隣接する大阪府守口市（筆者が住む市）にある京阪デパートのギャラリーにおいても、川上村の観光案内展示と特産品販売をおこなっている。

「水源地の森」と「森と水の源流館」

〈森村エコツアー〉研修の主フィールドである「水源地の森」は、吉野川の源流の一つである三之公（さんのこう）川の流域にある。面積は7.4038平方キロ（甲子園球場の約190倍の広さ）[19]。標高は480メートルから1050メートルでかなりの高低差がある。ブナ・モミ・ツガ・トガサワラ・コウヤマキをはじめ、貴重な樹木が自然の成長、交代を繰り返している[20]。トガサワラは、紀伊半島中南部と高知県東部にしか分布しておらず、「生きた化石植物」とよばれている。近くには国の天然記念物の「トガワサワラ原始林」がある[21]。1999年から2002年に川上村が購入し、以来、自然公園として管理している[22]。現在は水源地として保全されるとともに、環境教育とエコツアーのフィールドとして年間を通じて活用されている。2002年には財団法人「吉野川紀の川源流物語」を設立し、活動拠点としての「森と水の源流館」を開設し[23]、同館の主催・共催や共同企画による各種の研究・研修とエコツアーや芸術活動など、「森と水と人の共生」のためのさまざまな活動が展開されている。〈森村エコツアー〉研修もそうした活動の一つである。「森と水の源流館」には博物館機能とビジターセンター機能の両方があり、自然系と民俗系の両方の展示がなされている。

３　〈森村エコツアー〉研修の実践過程の六つの段階

着想から第２回現地研修の実施までのすべての過程を、〈森村エコツアー〉研修の実践過程ととらえ、それを企画・実施の実践主体である筆者の歩みにそうかたちで、次の六つの段階に分けて説明・検討する。

① 着想の段階
② 予備的体験調査と自己研修の段階
③ 初回研修の企画と準備の段階（シミュレーションを含む）
④ 初回研修の実施の段階

⑤　初回研修の「ふりかえり」と実施方法の改善の段階
⑥　第２回研修の実施の段階

３－１　着想の段階

〈森村エコツアー〉研修の原型の着想とその背景について書く。

「水源地の森」との出会い

川上村の「水源地の森」を主たるフィールドにして〈森村エコツアー〉研修をやるという着想を得たのは2005年６月12日（日曜日）である。この日は、「森と水の源流館」が主催した「インタプリター：源流の案内人講座（以下、《インタプリター講座》と略す)」の第２回の活動日で、筆者がはじめて「水源地の森」と出会った日である。研修の一環としてプロのインタプリターによるガイドツアーを参加者として体験しながら、同時にインタプリテーションについて現地学習するのがその日の活動であった。栃の葉や幹や芽鱗を観察したり、オオルリやカジカの声を鑑賞し、その姿や習性の図鑑をつかっての解説を受けたり、檜ゴケの感触を頬で味わってみたり、渓流の水をすくって飲んだりと、いろんな仕方で原生の自然をめいっぱい楽しんだ。最終目的地の渓流の淵のほとりの広場で輪になって座ったとき、インタプリターが葉書を参加者（研修受講生）に配って自分への便りを書こうと誘ってくれた。そして筆者はこう書いた。

「もっといたい、ずっといたい、ゆっくりしたい。　・・・また来て、ここで昼寝する。」

このときだと思う。この「水源地の森」を主たるフィールドとした研修を大学の科目として開設し、学生と共に、この「森と水」を体験体感し、天然の自然を味わい、エコツアーについて学び研究しようと決意したのは。

出会いと着想への道

この「水源地の森」との出会いには前史がある。記憶する最初の一歩は小学校５年生のアケビの実がなる季節、秋であった。級友３～４人と共に、大人抜きではじめて山登りをしたときである。大阪府四條畷市にある飯盛山の頂上で出会った壮年男性が、リュックのポケットにさしていたアケビの実を見せて、「おいしいよ」と教えてくれた。今から思えば、それはインタプリテーションだった。40年余り前のことである。以来、かぞえきれないほど、山や森や川や湖や海や里や原野の自然のなかでの遊びをかさねてきた。広い意味では、そのすべてが〈森村エコツアー〉着想の意図せぬ準備であったと見れる。

こうした自身内での蓄積を母体に、一定の方向性をもった探索と試行を意識的にはじめたのは大学４年生のときである。その年の６月から８月にかけてアメリカ合州国ワシントン州の森のなかのサンセットレイクという湖の畔にあるキャンプ場でカウンセラーとして働いた。自分にしっくりくる、天然の自然とかかわる仕事を見つけるという目標をもって。その後10月のはじめまで知人・友人を訪ねながら北米大陸横断を往復する旅をして、自分の夢をさぐった。コロラドスプリングスで出会ったナチュラリスト（自然と共にあることを暮らしと仕事の基本とする人）は、アメリカ合州国の自然を詩的に紹介する写真集に

「Find your dream. Live your dream.（夢を見つけて、夢を生きよ）」という言葉をそえてプレゼントしてくれた。

大学の教員となり、教育と研究の仕事として天然の自然とかかわることを具体的に構想しはじめたのは、1999年の８月から2000年の３月にかけてスウェーデンに滞在し、メーラルダーレン大学の客員研究員として福祉活動のフィールド調査をしたときである。福祉と社会保障の最先進地域である北欧の国スウェーデンには「自然享受権」という慣習法による人権がある。これによって私的所有の土地にある自然にも、一定のルールを守ることによって、すべての人間が入り、その恵みを楽しむことができる。また、こうした自然の恵みに日常的にふれることができるように、居住地域の計画・設計がなされている。そして、筆者が出会い、話をしたすべてのスウェーデン市民が、身近な森での茸狩りやベリー摘みを「あたり前」に楽しんでいる。「サマーハウス」とよばれる別荘を、「お金持ち」ではない平均的な市民も「あたり前」にもつことができ、そこで自然をゆっくり味わっている。フィールド調査に協力してくれた脳性マヒをもつ男性（主たる収入源は機能障害をもつ人への社会保険給付。高齢の母親との二人暮らし）も湖のちかくにサマーハウスを所有していた。それを知って、「人間の福祉」と「自然の恵みの享受」はつながっている、少なくともスウェーデンではそうだと考えた。

この経験が動因となって、大学の科目を通して、学生と共に自然の恵みを享受し、自然に学び、「人間の福祉」の基盤となる自然の保全と回復の一助とすることをめざしたフィールド探索調査を開始した。その主なものは、①2003年５月17日（土）から20日（火）の釧路川と釧路湿原、②2004年５月15日（土）から16日（日）の古座川と古座町、③2004年11月19日（金）から21日（火）の四万十川のカヌー=ツアーと西土佐村（2005年に中村市と合併し、現在は四万十市西土佐地域）、④2005年５月12日（土）から同年11月26日（土）の「水源地の森」と川上村の４地域における調査であった。

３－２　予備的体験調査と自己研修の段階

着想と構想、そして具体的な準備をつなぐ媒介要素となったのが、インタプリター講座を受講し、インタプリターとしての自己研修をしながらの予備的体験調査活動であった。

調査フィールドとのめぐり合い

2005年の５月の連休（黄金週間）の一日を奈良県山添村の探索調査にあてた。そのとき同村の森林科学館の受付前においてあった案内チラシの一つが「森と水の源流館」（以下、《源流館》と略す）が主催する「インタプリター：源流の案内人講座」（以下《インタプリター講座》と略す）についてのものだった。連休明けには、メールで源流館に問い合わせをしてインタプリター講座への申し込みをした。折り返しで、参加者プロフィールを送信するようにという返信がきた。添付されていた用紙の「自己アピール」の欄にこう書いた。

「今まで出会った食べ物で、食べなかったものは何もありません。おしゃべりなので、しゃべりすぎたときは注意してください。世界中のいろんなところへ行って、そこならではの自然と人との交流と食事と祭りを楽しみたいです。「生きものの共生」をこわさない「人間の共生」と「人間の福祉」をめざしています。」

この日からインタプリター講座の受講生、そして森に案内されるエコツアー参加者（エコな旅人、自然の生態系とともにあろうとする旅人）としての、川上村と水源地の森をフィールドとした体験調査が始まった。

インタプリター講座を受講しながらの体験調査

インタプリター講座の期間は、2005年５月22日（日）から同年11月26日（土）までの半年余りであった。その間に週末を活動日として６回の研修活動（講義・ワークショップ・実習・交流と懇親など）が実施された。毎回、個別テーマが設定され、初回のみが１回限定参加が可能で、２回以降も参加する人は全６回参加することを原則に申し込み、参加費を支払った。６回通しでの受講生は、筆者をふくめて８名であった。案内チラシにしめされた回ごとの実施日時とテーマは図表２の通りである。

以下、体験内容について、エコツアーの企画・実施をめざす者として何を考え、学んだかに重点をおいて、講座の日程にそってごく簡略に説明する。

図表２　インタプリター講座の日時と各回のテーマ

実施日 2005年	テーマと時間
5月22日（日）	① インタプリター講座〈初級編〉10:00～17:00 「インタプリターってなに？」
6月12日（日）	② 源流の案内人講座　9:30～17:00 「水源地の森と出会う」
7月 2日（土）	③ 源流の案内人講座　9:00～17:30 「インタプリテーションを体験する」
10月16日（日）	④ 源流の案内人講座　9:30～17:00 「森の見方・伝え方」
10月29日（土） ～30日（日）	⑤ 源流の案内人講座　10:00集合～翌日17:30解散 「企画を立て、案内する」
11月26日（土）	⑥ 源流の案内人講座　10:00～16:00 「ふりかえりとまとめ」

〔事前準備期間〕

申し込むとすぐに、「わたしのプロフィール」と題した自己紹介のための記入用紙が送信されてきた。このときから講座体験がはじまった。用紙には名前・住所など一般的な紹介とニックネームを記入する欄がまずあり、その下に「●得意技・得意分野」「●自己アピール」というのがあった。（自身がインタプリターである）主催者は、案内・指導する相手（参加者）についての事前調査をこんなふうにやり、同時に参加者が出発点での自身の姿勢を意識・確認し、心の準備をする機会を提供するのだろうと考えた。

講座活動の集合場所である源流館までの交通についての案内と最寄鉄道駅までの送迎の希望の問い合わせもメールであった。

〔５月22日（日）・・・初回「インタプリターってなに？」〕

エコツアーにおけるインタプリテーション（ツアー=フィールドでの出会や活動についての生態系との関連性の理解にもとづいた通訳と案内）。以下、《インタプリテーション》と略す）が、たとえば日本語とスウェーデン語といった異言語のあいだの「インタプリテーション（通訳）」とどこがちがって、どこが同じかについての講義と、〈インタプリテーション〉のグループ演習、そのためのウォーミングアップをかねた、参加者同士のうちとけあいを促進するグループゲーム（「アイスブレーキング」）が講師のリードと「森と水の源流館」のインタプリター（職員とボランティア）の補助でなされた。

この初回講座をとおして筆者なり理解した、エコツアーの理想のインタプリターとは、次の要件をみたす人のことである。

①「しゃべる」言語だけでなく身振り・手振り・表情・姿勢あるいは楽器など、さまざまなものをつかって、その場とそこに共にいる人と生きものに一番ピッタリなやり方で語る。

②単に学問的な知識としてではなく、全身（五感プラス直感）を通して見につけたフィールドについての感覚と知恵を生かして、その場で感じとった生（ナマ）の自然の営みとさまざまな表情を、参加者自身が、まず感じれるように、さりげなく導く。インタプリター自身の解釈を押しつけない。あくまでも「ひとつの」解釈として、参加者自身の自然との交信のさまたげにならないタイミングで、興味が持続する程度の量で、紹介する。

③インタプリターの服装やふるまいはフィールドに似合うものにし、参加者がフィールドにふさわしい形で楽しめるように演出する。

④きく（聞く、聴く、訊く）こと。音声による言葉だけでなく、相手のしぐさや表情などが語りかけることをきく。参加者と、フィールドの自然や文化を構成するさまざまなものが語りかけること、そしてインタプリター自身の内なる自然や経験や直感が語ることをきく。これは①から③の要件をみたすための必須前提条件である。たとえば、共にいる人に「一番ピッタリなやり方」を知るのは、共にいる人にきくことぬきには難しい。生（ナマ）の自然の営みとさまざまな「表情を感じること」と「きくこととは」一体となっている。

〔６月12日（日）第２回・・・「水源地の森と出会う」〕

午前10時、「水源地の森」に向かうバスのなかで、インタプリターの（ニックネーム）リンダさんが「川は誰のもの」のテープをかけてくれた。「やまに～　ふ～った　雨のしずく　いわを　すべり　おちて♪～」。しばらくして車窓からの山里の風景の中にいる興奮がすこしやわらいだころに、森と水にちなんだ自作の俳句を巻物に書いたのを披露しながら、川上村の歴史や森の生きもの話をしてくれる。もう一人のインタプリターの（ニックネーム）モッシーさん（苔の専門家）がときおり合いの手をいれる。この二人のガイドで「水源地の森」エコツアーを堪能した。「着想段階」の項にも記したように、このときに、学生と共に「水源地の森」を主フィールドとした〈森村エコツアー〉研修をすること

を決めた。

フィールドノートによると午後２時24分に源流の淵の「水に入り、水を飲み、水をくみ、水を飲んだ」。湧き水を飲めるところは、日本にはいくつもある。しかし、川の水をそのまま安心してゴクゴク飲めて、そして美味しいというところはめったにない。そうした経験をその前にしたのは、筆者が中学３年生の夏休み（40年近く前）に、大台ケ原（奈良県の中西部から三重県中東部にまたがる高原）から大杉谷をくだったときだけである。

〔７月２日（土）第３回・・・「インタプリテーションを体験する」〕

「シィー　キー　ピー　ピー」。（スズメ目ミソサザイ科）ミソサザイの声。朝、「水源地の森」へのツアー基地「森と水の源流館」の前できこえた。今日は、インタプリター講座の受講生が、源流館が企画・主催する通常のツアーでインタプリター体験をする日。ツアー参加者がすでに源流館のシアターに集合している。そこで、源流館職員とわれわれ講座受講生が自己紹介をすることになった。筆者は「インタプリター見習いの「ゆっくり」です。10年かけてリンダさんのようなインタプリターをめざします」と自己紹介した。（「ゆっくり」は今回の講座で自身につけた名前。）

プロのインタプリターが１～２人でやる一日のインタプリテーションを、講座受講生で分担・協力して、できるだけ自力でやりぬく。それをリンダとモッシーが見守り、必要に応じて自身もインタプリテーションをする。という方針で、インタプリテーションの体験実習がなされた。たとえば、受講生自身が栃の木の成長の仕組みや「生きた化石」といわれる針葉樹のトガサワラ、月の輪熊の生態などをめぐって、インタプリテーションを「する側」の体験をした。

〔10月16日（日）第４回・・・「森の見方・伝え方」〕

環境教育プランナーの（ニックネーム）コウスケさんの指導で、共同プログラムづくりの実習をする。活動によせる参加者のそれぞれの「おもい」を共通了解可能な「かたち（言葉や図）」にしてあらわし、討論や対話や共同作業をかさねながら結びつけたり、融合したり、統合したり、ぶつけあったりして、共同の「企画」を生みだしていく理念と技術と技能について学ぶのがその「ねらい」だった。

まる一日、源流館の向かいにある川上総合センター「やまぶきホール」の研修室で、異論・反論を遠慮なくぶつけあった。緊張が高まることもあった。そして、表面だけではない「つきあい」が始まったと感じた。そんな過程を通して、「ちがい」を生かしつつ「協働」する。グループでの「わかちあう」のときもつくるが、「ひとり」の時間も味わえるようにする。といった共同の「ねらい」をもった共同の「企画」の原案が生まれた。

原案での全体構成の骨子は、森の自然の観察と発見がコンセプト（固有の意味をもたらす概念）の「見つけ隊」と、森の自然を全身で感じて、森（の自然）と人（の内なる自然）とを響鳴させることをコンセプトとする「感じ隊」の２隊をつくり、最後に両隊が一緒に「わかちあい」をするというものだった。また、筆者が隊員となった「感じ隊」では、ひとりひとりがお気に入りの場所を見つけて「ひとり」の時間を味わうときと、グループでゲームをしたり、「わかちあい」をしたりするときとをつくることにした。

この企画づくり実習での発想と発案には共通源泉があった。それは、「水源地の森」と

いう地域固有の①フィールドの「よさ」を最大限に生かし、②参加者の思いを（事前収集の資料をもとに）できるだけ知り、それにこたえたい。そして③インタプリターの個性にものを言わせ、④それぞれの思いを大切にし、⑤「水源地の森」ツアーの体験で得たことをそれぞれが持ち帰って日常の暮らしにつなげ、生かしてほしい（自分も生かしたい）という願いであった。と筆者は考えている。

〔10月29日（土）～30日（日）第５回・・・「企画を立て、案内する」〕

一泊二日での研修である。１日目は企画の原案にそって役割分担や時間配分などについての具体的なつめと、インタプリテーションのフィールドである「水源地の森」での下見と下準備およびプログラムの確認をした。たとえば筆者については、トガサワラとコウヤマキの両方が近くで見れる地点でのインタプリテーションや「ひとり」の時間の終わりをつげる合図をかねてのリコーダー演奏などが役割になった。夜は民宿「ログキャビン高原」で合宿した。共に温泉に入り、食べて、飲んで、講座以外のさまざまな話題に花をさかせ、相互理解の厚みが増した。これで次の日のチームワークへの信頼が高まった。「ゆとり」も少しできた。少なくとも筆者にとっては。

二日目は本番。「感じ隊」は第２回の講座のときのツアーとほぼ同じルートをとり、「見つけ隊」は別のルートをとった。事故や参加者からの不満は、いずれの隊についてもなかった。参加者がツアー後のアンケートに書いてくれたことを３点、抜粋紹介する。

「いろいろな木々が立っていて落ち葉がいっぱい。奥はこけむした岩や倒木があり、緑一面きれい。森の楽しみ方や森のことを知ることができた。」

「普段の生活が人工的な物の中で行われているので、自分が自然の中に入っていると、本来の自分に帰るようです。」

「川の最初の一滴を見ることができて感動した。このわずかな一滴が、あんな大きな川になるというのが今でも信じられない。」

〔11月26日（土）第６回・・・「ふりかえりとまとめ」〕

インタプリター講座の企画・統括者でもあった二人のインタプリター（リンダとモッシー）と源流館の館長そしてボランティアが進行・演出する①「ふりかえり」と②「これからについての話し合い」、そして③「わかちあい」と④「修了式」の４要素からなる「しめくくり」と「出発」を祝う会が開かれた。この日は、（調査者としての立場を忘れて）一人の受講生としてその場の空気に純粋にひたりたいという思いで、ほとんど記録をとらなかった。したがって、ここでの記述は主に回想による。

会場は、初回の講座が開かれたのと同じ研修室。まず、講座の初回から５回までのあいだにインタプリターが撮った写真のスライドが音楽つきで上映された。全員が床に思い思いにすわり、それを鑑賞した。さまざまな場面での受講生の表情とその変化をとらえた映像がたくさんつづく。ときどき笑いが生まれ、連鎖・響鳴する。森と森での時間を共有し

た仲間の思い出に酔う。最後の映像を見終わり余韻を味わう。いったん研修室の外にでて一息つく。

次は、インタプリテーション実習のときにつくった「感じ隊」と「見つけ隊」の２グループに分かれて講座全体をふりかえっての感想をのべあった。その後、２グループが一緒になって全体での「ふりかえり」をした。そして昼食。

昼食後は、「ふりかえり」をふまえての「これから」についての提案を全員でだしあった。出た案は、来年度の「インタプリター講座の企画案」というかたちになるように、インタプリターのリンダさんがまとめながら白板にかいていった。それが一段落して小休憩。

休憩の後は、インタプリターとボランティアに導かれて一人ずつ研修室に入った。森の樹木の枝や葉などを配置して森の空気をつくっていた。部屋は暗くしてあり、足元が少しみえる程度の灯りがともされていた。中央に焚き火のようにした灯りがあった。車座になってそれを囲み、すわる。一人ずつ、思い立った順に語る。ときおり静寂な時間をはさみながら「ゆっくり」と「ふりかえり」を「わかちあう」。インタプリターもふくめて、みんなが語りおえて、修了式となった。

源流館館長（たっちゃん）が、一人ずつ（インタプリター名でもある）ニックネームと本名をよび、祝いの言葉をそえて修了証書を手渡した。証書には、はじめて「水源地の森」に案内してもらったときに、森に入る切符として受講生がそれぞれに拾って渡した落ち葉が（ラミネートをして）そえてあった。

３－３　初回研修の企画と準備の段階（シミュレーションを含む）

インタプリター講座の受講と並行して、所属大学において、〈森村エコツアー〉研修を大学の科目として実施するための準備をすすめた。

大学の科目とするための手続き

筆者が所属する人間健康科学科では、健康の維持・増進に有効な余暇活動を教育・研究の主要分野の一つとしている。そのなかの科目群に「レジャースポーツ（余暇スポーツ）」がある。〈森村エコツアー〉研修を、このレジャースポーツ科目の一つとして「エコツアーと自然公園ガイド」の名称で、集中講義の形式で科目化することをめざした。

丁度、この時期、高校卒業者人口の減少にともなう全国的な大学進学者の減少にどう対処して、受験生を確保するかが所属大学での大きな課題となっていた。その関連でより魅力あるカリキュラムづくり、あらたなタイプの受験生のニーズや希望にこたえる科目設定などの検討が本格化していた。こうしたなか、「人間の健康」とその不可分な条件としての「人間の共生」と「生きものの共生」をめざすという理念を明確にしめすとともに、「受験生を確保する」という課題にも適合するかたちで、（2005年７月20日の人間健康科学科の）学科会議における学科科目カリキュラム変更案の審議において、新規開設科目の一つとして「エコツアーと自然公園ガイド」（〈森村エコツアー〉研修）が提案され、承認された。

この学科の決定にもとづき、人間健康科学科は、（2005年９月28日の）臨時教務委員会における審議事案として、「エコツアーと自然公園ガイド」の新規開設をふくむ「人間健

康科学科・学科科目カリキュラム変更案」を提案した。その提案を教務委員会が承認し、(2005年11月30日の）人間科学部拡大教授会の審議事案として提案し、拡大教授会は「平成18年度人間健康科学科カリキュラムの改正」を審議事項とし、「人間健康科学科・学科科目カリキュラム変更案」を審議・可決・成立させた。その結果、2006年度入学者から適用される、２回生対象の人間健康科学科専門科目として「レジャースポーツⅤ（エコツアーと自然公園ガイド)」を新規開設することが決まった。ちなみに、この拡大教授会において、人間健康科学科専門科目である「手話通訳入門」の新規設置も決まった。「手話通訳入門」は既設科目の「共生のコミュニケーションⅠ（手話によるコミュニケーションを学ぶ科目)」の修得者を対象とする科目で、「人間の共生」のカリキュラム領域を強化する「ねらい」で「人間健康科学科・学科科目カリキュラム変更案」の変更点の一つとされたものである。

予算申請

科目設置の審議手続きの時期は予算申請の時期でもあった。科目設置のめどがついた段階で、現地シミュレーションのための費用を新規事業の「教材費」として来年度予算案に計上し、「野外活動やエコツアーを通した環境教育に関する図書」の購入のために、図書費の「共通特別枠申込」をおこなった。

研修プログラムづくりと現地シミュレーションの実施

「エコツアーと自然公園ガイド」は、２回生対象の科目として、2006年度の講義要目に掲載され、その年度に新入学生が２回生になる2007年の前期に第１回の〈森村エコツアー〉研修が実施されることになった。それに向けて、予備調査として現地シミュレーションのツアーを教員２名と職員１名の協力を得て、2006年の６月３日（土）から４日（日）の１泊２日で実施した。源流館の担当職員（インタプリターのモッシーさん）が終始同行し・共同で筆者による企画原案を現地で検討した。予算計上と費用の支払などの事務手続きについては、シミュレーションの参加者として同行した大学職員の女性もまじえて相談・確認した。原生林ツアーのルートは、インタプリター講座の「感じ隊」と同じものにした。多雨のため、原生林へ行くのが困難になった場合のプログラムの実施フィールド（「不動窟」とよばれる洞窟）の位置も確認した。参加者全員の感想・意見・提案をもとに次年度実施の初回〈森村エコツアー〉研修の実施要項を作成した。

救急法救急員講習の受講

2006年10月の２回の週末、あわせて４日間にわたる日本赤十字社主催の救急法救急員講習会に参加した。この講習会は、守口市民と大阪国際大学の学生・教職員を対象に、大阪国際大学を会場として、毎年実施されているものである。参加の一番の理由は、ツアー中の事故や発病に適切に対応する知識と技術・技能を身につけるためである。

研修実施のための事務手続などについての支援

学生からの参加費の徴収、大学負担の費用（教材費など）と現地利用施設への支払、保険加入などの手続きを大学の学部事務の優れた事務職員が担当してくれた。持参する救急用品セットも準備し、「忘れっぽい」筆者に「忘れぬように」とメールで注意喚起してくれた。同職員は現地シミュレーションに参加してくれた職員であり、担当教員である筆者

の弱点を熟知していて本当に「かゆいところに手がとどく」支援をしてくれた。これは本当にありがたかった。多数の人がかかわる団体活動を「ゆとり」をもって実施し、成功させるためには事前と事後の事務手続きと、さまざまな同行支援と後方支援をしてくれる熟練の事務専門職の協力がきわめて大きな意味をもつことを実感した。他にも、多数の人からありがたい支援を受けたが、それらについては割愛する。

直前下見

現地研修実施日の約４週間前の５月14日（月）に、源流館の担当職員の案内でツアールートと救急搬送先の吉野病院などの関連施設の下見をした。宿泊ホテルの支配人とはキャンセルが出た場合の対応・客室の部屋割り・研修室の使用・料金支払方法などについての再確認をした。ちなみに、現地シミュレーションについても、実施日の19日前の2006年５月15日に下見をしている。

３－４　初回研修の実施の段階

〈森村エコツアー〉研修における、受講学生の活動は大学内での事前研修と川上村での現地研修および研修レポートの作成の三つに分けることができる。

風疹のための日程変更

現地研修を６月９日（土）から10日（日）の１泊２日で実施すべく、学内での事前研修を５月29日（火）に源流館職員（モッシーさん）を講師に実施した。しかし、この少し前に風疹を発病した学生（〈森村エコツアー〉研修の受講生ではない）が確認されていた。それで二次感染予防のため、発病本人および他科目で本人と同教室にいた可能性のある学生の登学が禁止された。そのため約半分の学生が事前研修を欠席した。その後、感染の拡大があり、結局、現地研修は10月まで延期することになった。「麻疹感染も自然の一部、人為でコントロールしきれないところが自然の値打ち。よい学びの機会にしましょう」といったメッセージとともにその後の対応についての連絡を受講生にメール配信した。この間の対応は大変であったが、よい試練だとも感じ、感謝した。この緊急事態への対応（その内容はあらためて検討・紹介したい）について積極的かつ親切に協力してくださった関係者のみなさんと自然の恵みに。

事前研修の再実施

源流館の事業日程との関係で、現地研修の時期は10月６日（土）から７日（日）に決まった。それに向けての源流館職員を講師としての事前研修を、９月26日（火）に再実施した。

第１回現地研修の実施

延期しての研修は予定通りに実施できた。参加学生は15名。履修登録をした学生が多数で、「エコツアー」の適正規模にすべく、一定の優先順位によるしぼりこみで、６月実施の現地研修参加者は29名を予定していた。しかし、風疹流行のための延期にともなう辞退者が14名いた。

再三、注意していたにもかかわらず２名が集合時刻の30分遅れとなった。また、集合場所付近には昼食用弁当などの販売店がないと伝えていたのに、昼食を用意せずに来たもの

が２～３名いた。遅れにともなう時間調整のため、源流館での受付時間を短縮した。それ以外については特に問題はなく、おおむね予定どおりの時間はこびで実施できた。研修レポートの考察・感想欄を見るかぎり、受講生は全員、予期した以上の学びと楽しみを経験している。現地研修内容の検討は続稿でする予定である。

３－５　初回研修の「ふりかえり」と実施方法の改善の段階

参加学生と担当の源流館職員・現地協力者、もう一人の引率教員・シミュレーションに参加した教職員などとの話し合いやメール交信を通して初回研修を「ふりかえり」、次回へ向けての実施方法の改善について検討した。その結果の要点は次のとおり。

① 遅れてくる学生がいたので、集合時刻を早める。活動項目はそのままにして、時間的ゆとりをつくり、遅れについての調整をしやすくする。
② 集合場所の近鉄大和上市駅前には、昼食用の弁当やパンを販売する店が一切ないことを実施要項（学生用案内冊子）で強調・記載し、かつ事前研修において毎回、くりかえし確認する。
③ 風疹感染予防のため、現地研修が延期された。延期実施の時期を、延期決定後すぐ調整・確定し、学生に通知していたにもかかわらず、実施直前になって参加するか否かを迷い、「キャンセル料はいくらですか」といった問い合わせをしてくる学生がいく人かいた。源流館と宿泊施設のホテル「五色湯」の好意で、キャンセル料は無料となった。しかし、そのためホテルの使用客室を１室へらすことになり、男子学生が窮屈な思いをすることになった。また、人数減にともなう調整で、関係者に多大なご苦労をかけた。いったん「行く」と決めた気持ちがゆらぐことは理解できる。しかし、「キャンセル料がいらなければ、やめておこう」ということが、その引き金になるのは好ましくない。関係者の好意への「甘え」でもある。また、実際に参加した学生への迷惑効果（結果として使用客室が１室削減される）ももたらした。この問題への対応として、ホテルの宿泊料金についてのキャンセル料を設定し、キャンセルが出た場合も、予約した客室は全室使用できるようにする。源流館によるプログラムは、館の規則によりキャンセル料は徴収しないことになっている。この点についての対応を源流館職員と協議する。
④ 今回、２日目に人工林の間伐体験をした。次回は、より理解が深まるように、人工林が伐採された跡地の見学もプログラムに入れる。

３－６　第２回研修の実施の段階

第１回の「ふりかえり」を生かすかたちで第２回研修のプログラムを企画・実施した。

第２回研修のプログラムの概要

第２回研修のプログラムの概要は次のとおりである。

〔研修期間〕

2008年４月23日の大学内での初回事前研修のときから研修レポートの提出までの期間を

研修期間とした。

〔現地研修の実施時期と集合・解散〕

2008年の５月24日（土）から23日の１泊２日で実施した。集合・解散場所は川上村への最寄り鉄道駅である近鉄大和上市駅の駅前とした。集合時刻は午前10時25分で、解散予定時刻は翌日の午後５時30分。ちなみに初回は集合時刻が午前11時であった。遅れる学生がいたので、第２回は35分早めた。解散予定は初回と同じである。

〔ねらい〕

「原生林や山里と自分の心身が共鳴する心地よさと楽しさをガイドツアーに参加して味わう。生態系（エコシステム）の保全・回復と両立する野外活動やレクリエーションについて、インタプリター（エコツアーの企画・案内の専門家）による現地指導を受けながら体験学習する」をプログラムの「ねらい」とした。

〔主な活動内容〕

研修は大学内での事前研修と川上村での現地研修からなり、プログラムにおけるそれぞれの主な活動内容は図表３のとおりである。

図表３　2008年度プログラムにおける主な活動内容

実施場所	実施日	主な活動内容
大阪国際大学 （守口キャンパス）	４月23日	〔学内研修１〕 ●担当教員による①研修全体の概要と②評価方法③および参加費の入金などの手続きの説明と、④インターネットによる集合場所までの交通ルートと利用交通機関の発着時刻の確認と事前報告についての指導。 ●研修実施要項の配布。
	５月14日	〔学内研修２〕 ●現地インストラクター（自然公園ガイド）による講演とオリエンテーション（安全確保のための必需装備と毒ヘビ・スズメバチなど危険性のある生物についての安全対策の指導を含む）。講演テーマは「エコツアーのフィールドとしての原生林と山里、そしてエコツアーの楽しみ方」。
	５月21日	〔学内研修３〕 ●担当教員による講義とオリエンテーションおよび日程の最終確認。講義のテーマは「エコツアーの体験調査方法とレポート作成の仕方について学ぶ」。
川上村 （「水源地の森」他）	5月24日	〔現地研修（初日）〕 ●　「水源地の森」ツアー（多雨の場合は不動窟鍾乳洞探検など） ●　ホテル「五色湯」に宿泊
	5月25日	〔現地研修（第２日）〕 ●　人工林での間伐体験 ●　山村の自然食賞味 ●　チゴロ淵人工林（約300年前に植林された杉の大木がある人工林）の見学

現地研修プログラムにおける日程と予定活動の詳細については稿末添付資料「大阪国際大学エコツアーと自然公園ガイド研修の日程と活動」を参照いただきたい。また、現地研修内容に注目した検討は別稿でおこなう予定である。

〔実施要項の目的と構成〕

参加学生と現地インストラクターなどの関係者に実施要項（「レジャースポーツⅤ（エコツアーと自然公園ガイド）【2008年度実施要項】」）を配布した。同要項の目的は、研修の骨子と要点について参加学生と関係者の共通了解を促進することである。その構成は①研修の「ねらい」など研修全体についての説明と②大学内事前研修と③現地研修のプログラムの紹介、④現地研修のための個別準備（個人装備品の用意など）の指示、⑤緊急連絡先・最寄りの救急医療機関など緊急時対応関連事項および⑥研修レポート作成用紙からなる。現地研修のプログラムについては、通常の場合と、多雨で「水源地の森」での活動をとりやめた場合の両方を紹介した。また、初回研修の「ふりかえり」をふまえて、初日の昼食用弁当の持参についての参加学生の注意喚起をさらに強くするために、〔持ち物〕の項に、その他の持ち物と並べて「弁当（第一日目の昼食用）」と記すだけでなく、持ち物リストの下に次の表現を挿入した。

＊初日の昼食の弁当は持参です！！　集合場所には、弁当やパンの店はなし！！。
買うなら、近鉄電車に乗るまでに。

第２回研修の実施

現地研修実施日は天気予報によると両日とも雨の可能性大だった。しかも多雨地域の川上村の入梅の季節。しかし、幸運にも時々雨であったが、「水源地の森」を歩いたときには雨はなく、雲のあいだから青空が見え、木漏れ日がさすこともあった。初日はほぼ予定どおりの活動ができた。学生２名が集合に20分ほど遅れた。しかし、初回研修の「ふりかえり」により、第２回は、遅刻者が出ることを想定しての「ゆとり」をもった時間設定にしていたので、遅刻による支障は出なかった。集合地から川上村へのツアーバス内で、遅刻の２名が他の参加者に対してお詫びをのべた。研修レポートによると「時間厳守が重要である。一人が遅れるだけで、同行者全員が遅れてしまう」といった学生の的確な問題認識が確認できた。

「水源地の森」の後はホテル「五色湯」へ。部屋割りの発表とチェックイン。入浴はそれぞれの判断で適宜に。夕食後には「ふりかえり」の時間を研修室でもった。「水源地の森」ツアーで２班に分かれた参加者全員が、ここではたがいに顔を合わせられるように、長方形にならべた会議机をかこんですわった。そして、すべての参加学生にとって初めてだった「原生林の体験」について、それぞれが語り「わかちあい」をした。夜はかなりの雨がふった。学生は深夜まで語り合い、交流したようだった。

二日目の朝は、まだ少し雨がのこった。間伐体験の指導担当の源流館館長の判断で、間伐体験を少し遅らせ、朝食後は多雨の場合の初日のプログラムとして予定していた不動窟

の洞窟探検にあてた。この変更は、その間に雨があがり、間伐地の地盤がおちつくという予測による。この予測はピッタリ当たった。

昼食は山菜たっぷりの「炊き込みご飯」。それに鹿肉の佃煮や漬物がそえられた。大釜を野外においた釜戸にかけた。枯れ枝や間伐材が燃料。火おこしと、釜戸の世話についての実地研修。その講師は源流館館長。釜飯炊きと後片付けの指導は源流館館長夫人。プログラムでは「流しそうめん」で涼を楽しむことになっていたが、雨もようで気温が低くなると予測し、温かさを楽しむために「釜飯」にした。

昼食後は３班に分かれて間伐体験をした。班ごとに、樹齢40年ぐらいの杉を数本伐採した。伐採した杉をチェーンソーで切る体験もした。杉や檜の幹を平たく輪切りにしてコースターをつくり、参加者の「手作りみやげ」にした。後片付けをしてバスで枌尾チゴロ淵人工林に向かう。

徳川吉宗の時代に植えられたという樹齢約300年の杉の大樹が立ち並ぶ人工林の見学。間伐・整備がゆきとどき、林床には草木がほどよく美しく育っている。そこにまっすぐ立つ幾本もの杉。３～４人で手をつないで杉の太い幹を囲んで記念撮影。

プログラム上の最終活動である「山幸彦のもくもく館（川上村林業資料館）」見学は、午前の「不動窟の洞窟探検」にふり替えとした。

現地研修の「しめくくり」として、源流館正面玄関前に研修参加者と現地関係者が集合し、まず学生代表がお礼の言葉を述べた。それにこたえるかたちでインストラクターと源流館の館長・職員が、それぞれの思いを語り、学生への期待に満ちた言葉を贈った。

段階の循環更新性について

実践過程の段階としては、第２回研修の実施の段階の次には初回と同様に「ふりかえり」の段階がくる。「ふりかえり」は、それまでの活動の省察を生み、次の実践のためのプログラム更新についての着想の源になりうる。つまり、上にしめした〈森村エコツアー〉研修の実践過程の六つの段階は、機能的に見ると一つのサイクルをなし循環的であると筆者は考えている。筆者自身、すでにこの原稿を書きつつ「ふりかえり」をし、次に向けての新しい構想をねりはじめている。また、今後は本論文を一資料とし、参加学生や協働者・協力者と共に、これまでのプログラムと実践についてふりかえり、省察をし、プログラムの改善・更新をめざす予定である。その歩み（実践）が、六つの段階を「ゆきつ、もどりつ」しながら前に進み、質的には「らせん階段」をのぼるように、上昇していくことをめざしている。

４　今後の課題：「むすび」として

筆者は、〈森村エコツアー〉研修という一つの共同活動実践（共同プロジェクト）を着想・構想し、その現実化のための企画原案をつくり、協働者・協力者と参加者を得るために提案し、訴えた。幸いに、多数の人びとの協働・協力と参加をえて、企画をねりあげ、協同（共同目的のための協働と協力）の力で２回の〈森村エコツアー〉研修を実行できた。この実践により、少なくとも、自分自身は期待をこえる「喜び」と「楽しみ」を味わい、

「学び」の機会を得ることができた。研修参加学生と協働・協力者についても、その発言や「研修レポート」などでの記述において、それぞれの「喜び」と「楽しみ」と「学び」の経験を伝えている。

こうした経験を生み出した過程を、最初の一人の参加者である筆者の記録・記憶と体験の「ふりかえり」をもとに、簡略に省察してみた。その「むすび」として、〈森村エコツアー〉研修の今後の課題を大きく、教育実践上の課題と研究実践上の課題に分けて書く。

教育実践上の課題

２点にしぼって書く。

１点は、どのように発展性をもたせるかが教育内容についての課題である。学生の反応から、原生林をふくむ自然がゆたかな環境の価値を体感・体験し、理解する機会を提供することはできていると言える。これは研修の「ねらい」（「はじめに」で紹介）にふさわしい成果が、すくなくともいくらかは上げえたことを意味する。そのことからのつながりとして、研修における体験をどう発展させていくかが今後の課題となる。大学教育としての実務上の課題としては、次の段階の科目をつくるべきか、また、つくるとすればどのような科目にすべきかの検討が今度の具体的な課題である。事前研修の段階から終始くりかえし、学生に対して、こう訴えた。

「ひとりの参加者として、あなたのために企画されたツアーに参加するという視点と、自分が企画し、インタプリターとして案内する側になったとしたらどうかという視点、短く言えば「してもらう視点」と「する視点」の両方から見て考え、記録・発言してほしい」

「また来たい、単位はなくてもまた来たい」という学生が多数いた。この８月に実施される子ども対象のキャンプのボランティア募集の案内が源流館から届いた。早速、その案内を学生に配布した。「レジャースポーツ指導論」という科目が所属学科にある。この科目での現地研修を、「水源地の森」と川上村でしたいという希望を出している学生がいる。

また、日常の暮らしとエコツアー活動とをむすびつけて、継続性・連続性のあるものとして発展させることも大切である。その「ねらい」をもって、源流館のインタプリターに、大学のキャパスの自然環境や生態系についてのインタプリテーションのフィールド指導をしてもらう構想について関係者と相談している。

２点目は、実施形式についての課題である。エコツアーは、フィールド環境への破壊的負荷をできるだけ少なくし、一定の限度をこえないようにし、環境の保全や回復に寄与するかたちであることが、成立の大前提である。そのため、１回ないし１グループあたりの参加人数を一定限度内にとどめることが不可欠な条件である。〈森村エコツアー〉研修については一定の基準で優先順位を設定して参加人数の調整をしてきた。さらに事前研修時期の麻疹感染や履修科目手続きの情報処理トラブルの影響もあり、初回も第２回も参加学生数は15名になった。また原生林ツアーのときには、さらに15名を、参加者の希望にそって「感じ隊」と「見つけ隊」の２班に分けた。そして１班を10名以内にし、適正規模の単位グループでのツアーができた。また、間伐体験では初回は２班、２回目は３班に分けた。

班ごとにインストラクターをつけた。その費用は大学の「教材費」をあてているが、経費削減を要求されるなか、毎年その確保に苦労している（経費問題については後続の稿で検討したい）。また、受講希望した学生全員に参加機会を保障できないのが残念である。なんとか予算を確保し、前期・後期に各１回、通年で２回の実施ができればと考えている。

研究実践上の課題

本稿では、〈森村エコツアー〉研修の実践過程全体について簡略に記述・検討した。それは、全体のなかでの各部の位置とその相互関係（構造）をとらえ、かつ歴史的な視点をもって、諸要素の中身を記述・検討・紹介するという次の目標への一歩でもあると認識している。この認識のもとに設定した、今後へ向けての研究実践上の課題が次の４点である。

１点は、実践段階ごとのより詳しい記述・検討を、いくつかの論稿にわけておこなうことである。これによって本稿を補完し、実践過程についてのより深い理解をめざす。

２点は、本稿において企画・実施者の視点でとらえた六つの実践段階を、活動要素（段階をよこぎって、複数が同時的に存在し得るもの）とその機能に着目してとらえなおし、活動要素別の記述・検討と構造・機能分析による理論的説明をめざすことである。この一環として、たとえば、経済的活動要素である「経費の調達・使用」や教育的活動要素である原生林ツアー参加や間伐体験などの現地研修活動に注目した記述・分析をしたい。

３点は、〈森村エコツアー〉研修を継続実施し、同実践についてのフィールド調査と研究を継続し、その結果にもとづいた改善や新たな活動を企画・実施して、その過程と効果についての調査（フィールド実験調査）をすることである。

４点は、研修参加学生やインタプリターなどさまざまな人との共同研究をめざすことである。言うまでもないことであるが、共同という「もう一つ」のやり方をくわえることで、単独の研究をこえる可能性が生まれる。これは、教育実践上の課題としてあげた「発展性をもたせる」ということと連動する。研修参加学生が研究者としてもフィールドにかかわることを期待している。筆者が担当する３回生セミナー所属の学生で、〈森村エコツアー〉研修の参加経験をもち、卒業研究のフィールド調査地として〈森村エコツアー〉のフィールドである川上村を選だ人が１名いる。エコツアーに関連する研究を検討中の人が現時点で２名いる。また、車いす使用者であり、かつ野外活動の専門家（野外活動用品の企画・販売専門店「モンベル」の店長）でもある筆者の友人との共同で、「車いす使用者も参加する」、「水源地の森」ツアーを実施するための現地調査を2008年７月からはじめている。

以上の教育実践上および研究実践上の課題を協同の力で達成しつつ、さまざまな「しょうがい」をもつ人もふくむ誰もが楽しく参加できる〈森村エコツアー〉研修を実現し、「人間の共生」と「人間の福祉」の推進の一助としたい。

注

（１）川上村役場ホームページ［http://www.vill.kawakami.nara.jp/］。

（２）大阪国際大学・人間科学部・人間健康科学科『レジャースポーツⅤ（エコツアーと自然公園ガイド）【2008年度　実施要項】』。

（３）A4サイズ２頁に、時系列にそって研修プログラムを７つの部分に区分し、各部分ごとに参加者が体験調査したことと、それについての考察を書く形式のレポート用紙。研修の実施要項に組

み込まれている。レポート作成の指導にあたっては、レポートの内容を〈森村エコツアー〉研修の改善とエコツアーの推進のための研究資料として活用することを説明し、そのことについての承諾を得た。

（4）《体験調査》とは、研究対象となる活動の現地に研究者自身の身をおき、対象活動を自身が体験する（つまり実際に自分がやってみる）ことを通して知ったこと、感じたこと、考えたことを記録し、資料をつくり、その資料をもとに対象活動がどのようなものか（その構造や機能）をとらえようとする調査で、《フィールド探索調査》の調査方法の一つである。フィールド探索調査は、人間が活動している場（人間活動のフィールド）に身をおき、その場の空気を全身で感じとりながら、そこで、今、展開されている生（なま）の人間活動とそれに関連するさまざまな事実（自然条件・地理・歴史・法規・制度・人間関係・価値意識・経済などと、調査員自身が感じ・考えること）について探索しながら、つまり「さぐりもとめながら」調べることである。その主たる調査方法は、①参加観察調査と②聞き取り調査、③体験調査、④文献調査の四つである。［詳しくは橋本義郎（2006：77-79）を参照］。

（5）たとえば、日本エコツーリズム協会は、エコツアーとはエコツーリズムの考え方にもとづいて実践されるツアーの一形態であるとし、「エコツーリズムとは、①自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること。②観光によってそれらの資源が損なわれることがないよう、適切管理に基づく保護・保全をはかること。③地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護+観光業の成立+地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする」としている〔http://www.ecotourism.gr.jp/ecotour.html〕。また、国際エコツーリズム協会（The International Ecotourism Society）は「責任をもって地域環境を保全し、地域住民の暮らしをよりよくする仕方で、地域の自然とかかわる旅」をすることがエコツーリズムだとしている〔http://www.ecotourism.org〕。なお、2007年６月20日の参議院本会議において成立したエコツーリズム法（第２条第３項）は、「観光旅行者が、自然観光資源について知識を有する者から案内又は助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動」を「エコツーリズム」というと定義している。

（6）「生きものの共生」（原語はドイツの植物病理学者アントン=ド=ベイリがはじめて使ったsymbiosis〔石川統（1988：６）〕）とは、生物の種のあいだを横断する「生きもの」同士の、食べたり、食べられたり、養分を吸収したり、養分として吸収されたり、あるいはある「生きもの」が排出した物質（たとえば動物がはいた二酸化炭素）を他の「生きもの」（植物）が摂取したりする関係と、たがいに利用しあいながらさまざまな種の「生きもの」が共存し、種の多様性をたもっている関係のすべてのこと〔橋本義郎（2006：85）〕。

（7）「人間の福祉」とは「特権（特別な身分や力）」をもつ者としてではなく、ただの人間として快く暮らすことである。それを追求・享受することは人権―人間としての活動の権利、差別とむすびつかない権利―であり、特権と対立する。特権は特別な身分とそれにむすびついた待遇や財力・権限などの特別な利益のことで、これをもつ者ともたない者とのあいだに差別が生まれる〔橋本義郎（2001：156）〕。

（8）「人間の喜び」とは、その追求が人権である、そうでなければ、そうしなければならない「喜び」のことで、特権とむすびつかない「喜び」のことである。たとえば、自分の好きな公共の自然公園の森を散歩し、さまざまな生きものに出会い、美味しい空気を味わう喜びは「人間の喜び」である。これに対して、いわゆる「ブランド」ものの高価な品々を所有して、それらを持てない人に対する優越感を味わう「喜び」は、それらを購入できる特別な財力とむすびついた特権で、「特権者の喜び」であり、「持つ者」と「持たざる者」のあいだの差別を前提とする。

（9）（1）と同じ。

(10) 川上村役場（2005：17)。
(11) 川上村教育委員会（1989:460)。
(12)（１）と同じ。気温は大迫ダムで観測（午前９時現在)、降水量は川上村役場で観測。
(13)（１）および大阪市役所ホームページ〔http://www.city.osaka.jp/〕による。
(14) 同上。
(15)（１）による。
(16) 川上村役場（2005：34)。
(17)（１）と同じ。
(18) 奈良県の川上村役場地域振興課主事の吉田志帆氏からのメール（2008年８月11日送信）でのご教示による。
(19) 全国林業改良普及協会（2005)。
(20)「森と水の源流館」ホームページ〔http://www.genryuu.or.jp/index.htm〕。
(21) 同上。
(22)（１）と同じ。
(23)（１）と同じ。

参考・引用文献

赤地学（2005)『自然に学ぶものづくり：生物を観る、知る、作る未来に向けて』。
石川統（1988)『共生と進化：生態学的進化論』培風館。
江崎保男（2007)『生態系ってない？：生きものたちの意外な連鎖』中央公論。
カーソン、レイチェル（上遠恵子訳)（1996)『センス・オブ・ワンダー』新潮社。
川上村史編纂委員会（1989)『川上村史（通史編)』川上村教育委員会。
海津ゆりえ（2007)『日本エコツアー・ガイドブック』岩波書店。
川上村役場（2005)『川上村村勢要覧2005：水の旅人』川上村役場。
川嶋直（1998)『インタプリターという仕事』小学館。
環境省〔編〕(2004)『エコツーリズム：さあ、はじめよう』日本交通公社。
黄瀬桂子（2004)『清流の語り部たち』森と水の源流館。
敷田麻実（2008)『地域からのエコツーリズム：観光・交流による持続可能な地域づくり』学芸出版社。
全国林業改良普及協会（2005)『SGEC森林認証審査報告書（川上村村有林　平成17年３月)』。
田中淳夫（2007)『森林からの日本再生』平凡社。
日本林業技術協会〔編〕(2000)『里山を考える101のヒント』東京書籍。
橋本義郎〔編著〕(2006)『「人間の共生」をめざして：〈インクルージョン〉の福祉学』相川書房
橋本義郎（2001)『福祉活動のフィールド学：スウェーデンと日本・アメリカでの試みから』明石書店。
谷田貝光克（1995)『森林の不思議：気持ちをやわらげ、生命を吹き込む森林浴』現代書林。
渡辺格（1979)『新しい人間観と生命科学』講談社。

資料「大阪国際大学エコツアーと自然公園ガイド研修の日程と活動」

タイトル	「大阪国際大学エコツアーと自然公園ガイド研修の日程と活動」
実 施 日	2008年５月24日～25日
時　　間	初日　10：30～21：00　　第２日　7：30～17：30
場　　所	三之公・水源地の森　他

＜日程＞

５/24	土曜		
	10:30	大和上市駅発	研修Ⅰ
		川上村・水源地の森の概要説明	
	11:30	森と水の源流館	
		・受付	
		・どうしてもの人だけトイレ休憩	
	11:40	森と水の源流館発	
	12:05	五色湯着	
		・トイレ休憩	
	12:15	五色湯発	
	12:35	管理棟着	研修Ⅱ
		・昼食	
	13:15	水源地の森・山ノ神着	
		・アイスブレーク（サークルボールで自己紹介）	
		・水源地の森エリア説明	
		・準備運動	
		・ヤマビル対策・危険生物説明	
	13:40	山ノ神発	研修Ⅲ
		・水源地の森散策	
	14:40	アマゴプールにて休憩	
		・自然観察グループ	
		・ゲームグループ	
		・のんびりグループ（達っちゃんとお話し）	
	15:00	アマゴプール発	研修Ⅳ
	15:20	シオジポイント	
		・自由時間	
	15:30	シオジポイント発	
	16:30	山ノ神発	
	16:35	管理棟	
		・どうしてもの人だけトイレ休憩	
	17:00	五色湯着	
		・山村のホテル経営についての講義	研修Ⅴ
		・入浴	
		・夕食	
		・ふりかえり	
	21:00	・交流会	
５/25	日曜		
	７:30	起床	
	８:00	朝食	
	９:00	五色湯発	研修Ⅰ
	９:30	水源地の森管理棟着	
		・間伐講師の紹介	
		・注意事項	
	９:45	講師デモンストレーション	
	10:00	グループ（３班）に分かれて間伐体験	
	12:00	昼食（そうめん流し）予定	
	13:00	間伐体験続き	
	14:00	間伐体験終了	
		・道具片付け	
	14:15	水源地の森管理棟発	
	14:45	五色湯	
		・トイレ休憩	
	15:00	五色湯発	研修Ⅰ
	15:20	枌尾チゴロ淵着	
		・人工林見学	
	15:40	枌尾チゴロ淵発	
	16:00	もくもく館着	
		・見学	
	17:00	もくもく館発　バス内でレポートの提出	
	17:30	大和上市駅着	

＜参加者持ち物・服装＞

・水筒（お茶）　・雨具　・タオル
・弁当　・ビニール袋　・保険証（写し）
・帽子　・ペットボトル　・あればルーペなど　・軍手
・敷物　・滑りにくい靴　・ビニール袋

〈インストラクターが用意するもの〉

□ 救急セット　□ 塩水　□ トイペ
□ 水質パッチテスト　□ 石鹸　□ デジカメ
□ ビニール袋　□ アンメルツ　□ ユニパック
□ 説明用　写真類　□ 軍手

タイトル	「大阪国際大学エコツアーと自然公園ガイド研修の日程と活動」（多雨の場合）」
実施日	2008年５月24日～25日
時間	初日　10：30～21：00　　第２日　7：30～17：30
場所	三之公・水源地の森　他

＜日程＞

10:30	大和上市駅発 ・川上村・水源地の森の概要説明	研修Ⅰ
11:30	森と水の源流館 ・受付 ・見学	
12:30	昼食　（デッキ屋根下）	研修Ⅱ
13:10	森と水の源流館発	
13:20	柏木不動窟着 ・見学	
14:00	柏木不動窟発	
14:05	柏木集落着（館長倉庫） ・柏木ガイドツアー ・経塚 ・朝日館 ・くすりみず ・etc	研修Ⅲ
15:00	柏木発	研修Ⅳ
15:30	金剛寺着　　金剛寺見学	
16:30	金剛寺発	
17:00	五色湯着 以下、晴天日と同じ	